

書評

堀江典生 編著

『現代中央アジア・ロシア移民論』

(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)

大津定美 (神戸大学名誉教授)

ソ連社会主義が崩壊して二〇年、かつてソ連領であった中央アジア諸国での経済と社会は怎么样了なっているであろうか。それを労働移動と移民という問題を軸に検証しようというのが本書の狙いである。同趣旨の問題意識で、中・東欧地域や中国・極東ロシアにおける状況を追求した類書がすでにいくつもあるが(文末リスト参照)、中央アジア地域に関するわが国での包括的な研究書としては、本書が鎬矢である。

本書は、文科省科研費の補助を受け実施された調査とそれをもとに開催された大規模な国際シンポでの報告論文がもとになっている。執筆者の国籍は、ロシア、カザフスタン、韓国、日本の四か国となっているが、移民研究者の常として、絶えず現地調査に歩き廻っているコスモポリタン

が多いから、筆者の国籍をあまり重視する必要はないかもしれない。

I

本書の編別・省別構成は以下のとおりである(執筆者名は省略)。

第一部 中央アジア・ロシア移民問題の領域

第一章 中央アジア地域の人的資源と社会状況

第二章 労働移民がたぐロシアと中央アジア

第三章 中央アジアにおける人身売買との戦い

第四章 C I S 諸国の移民問題への I L O の取り組み

第一部は、研究対象についてのいわば総論で、第一章は、中央アジア地域の経済・社会状況の人口論視角からの概論、とくに人的資源のストックに重きをおいて概観する。第二章は、旧ソ連時代からの長い歴史をもつ中央アジア・ロシアの移民の歴史的・今日の問題状況を一瞥するもので、第三章は、「人身売買」という特定の、とはいえないわめて先鋭な問題領域からの問題提起、第四章は I L O (国際労働機関) が C I S の労働移動問題をどのように捉えているかの概観を示している。

第二部 中央アジアからロシアへの移民

第五章 シベリアへ向う中央アジア移民

第六章 カザフスタンを経由する移民たち

第七章 モスクワの中央アジア移民

第Ⅲ部 中央アジアからカザフスタンへの移民

第八章 カザフスタン移民政策の基本コンセプト

第九章 カザフスタンへの移民

第一〇章 カザフスタンにおける移民定着の諸問題

第十一章 カザフスタンにおける移民の変容

第Ⅱ部と第Ⅲ部は、中央アジアからロシアへ、そして中央アジアからカザフスタンへという、二つの大きな流れを区別して取り扱う。中央アジアとロシアの移民というと、従来は送り出し先と受け入れ先と二分して、しかし流れは一方向で捉えられてきた。しかし、経済成長軌道に乗り始めたカザフスタンは、二〇〇二年から「受人国」に転換した。この流れの変化を大きく捉えようとする点でも、本書は新しいアプローチを試みているといえる。カザフ移民研究としては、日本ではごく少数の論文があるだけだ。本書の表題に「中央アジア」とあるが、カザフスタンの比重は圧倒的に大きく、あえてワンセクションを設定している。

第Ⅳ部 市民・移民・地域の安全保障

第十二章 中央アジア、ロシアにおける移民と「人間

社会の安全保障」

第十三章 中央アジアのシティズンシップと安全保障

第十四章 シベリア・極東地域におけるステレオタイ

プと移民恐怖症

第十五章 ロシアにおける超エスノフォビア

第十六章 カザフスタンにおける人身売買のリスク

第Ⅳ部は、これまでの諸章が人流・フローの側面を重視した分析となっていたとすれば、ここではいわば人流が引き起こす「ストックの課題」で、「人間の安全保障」、「エスノフォビア」や「人身売買」など社会的課題とそれへの対応など、これまでわが国ではあまり紹介されてこなかった問題だ。それを中央アジアという地域での特殊性を考慮に入れた視角から迫るといふ、きわめてユニークな課題設定とみることができる。

さらに、付録・付属資料「モスクワに住む中央アジア移民たちの証言」は、モスクワで暮らす移民労働者・非合法滞在者も含めて、計二〇人へのインタビューの実録で、第Ⅳ部までのマクロな分析とは異なって、徹底的に個人に密着したライフヒストリー、移民労働者としての生活と仕事、モスクワという特殊な社会で家族から離れて一人で暮らす人々のミクロの実像に迫ろうという試みである。街頭で掃除人として働いている人に話しかけ、ましてや暮らしや所得についてあれこれ聞き出すのは、普通の日本人には至難の業だ。こうした調査は、まさに国際的な研究協力なしには不可能で、本書のいまひとつの大きな特色となっている。

本書の各章の内容は、編者による「はじめに」で簡に所要をえた紹介がなされているので、それをご覧いただくのが最適である。

以上のように、本書は、実に大きなテーマに多面的かつ包括的に迫ろうとしているので、全体を咀嚼し成果を簡潔に纏めるのは容易ではない。ここでは二、三のテーマに絞って、若干のコメントを試みよう。

II

世界的に見て、移民研究はすでに長い歴史を持っているが、ソ連崩壊でグローバルゼーションが加速され、資本や情報だけでなく国境を越えた人・労働力の流れも近年ますます活発になっている。この流れをどういう学問ディシプリンから捉えるのか。経済学、法学、社会学などさまざまなアプローチがありうるが、従来の学問研究は暗黙の裡に「二国システム」を前提としており、国際移民のようにいわば境界を超えた、境界のないフローを対象とする研究には、単一の研究方法論はなお存在しないといえよう。

ロシアの場合で見ると、国際労働力移動・移民研究は幅が広く、かつソ連時代から見ても長い歴史を持つ。ソ連崩壊以後には、旧共和国が独立し新たな国境ができたことにより、旧来の国内移動が国際移動となり、一挙に問題が複

雑化した。そこで、実に多くの研究機関や個人の研究者が関わってきた。その意味では、国際労働力移動研究は最近の社会科学分野での一大人気テーマとなった感がある。それを担う研究者の層も実に厚く、本来の狭いディシプリンをかなぐり捨てて未知の広野に飛び出した形の「新参者」も多いともいえよう。現在のモスクワに限っても、筆者の見たところ、三つのグループが存在する。ひとつは、モスクワ大学人口学研究センターにつながる研究者でイオンツェフ教授を中心にしたグループで、第二は、ロシア科学アカデミー「生産力配置研究所」をベースに新たに形成された「強制移住研究センター」(Forced Migration Center, FMC)につながる研究者で(中心はジャンナ・ザイオンチコフスカヤ女史、本書第二章筆者)、ロシア各地に協力者をもち、IOM(国際移住機構)モスクワ支部も強い協力関係にある。第三が、地方を含めそれ以外のいくつかの大学ないし研究所にまたがる緩い繋がりで、とはいえ上記二つのグループとは明らかに異なる志向を持つ。

三つのグループの性格を強引に特徴づけるとすれば、第一は人口論研究から、第二は経済地理学から、第三はそのほか多面的なアプローチを採用する人達、といえようか。またこれ以外にも、中国や北朝鮮からの労働移民が顕著なロシア極東においても地域特性に注目する移民研究者が少なくないし(ハバロフスクやウラジオストクなど)、研究

成果も多数刊行されている（とはいえ、この地域で国境を接した中国にはまだそうした移民研究グループは見られない。このテーマはなお「禁じられた」分野に近いようだ）。

評者は（私事となるが）、主に第二のグループとこの一〇年以上研究交流を重ねてきたし、二〇〇二年にはジャンナ・アントノヴナさん（本書第二章筆者）や中国の移民研究の第一人者ゲリブラス教授を京都にお招きして国際シンポジウムをもった（成果は文献①）。また、FMC主宰のシンポジウムに参加（モスクワ二〇〇一、二〇〇六だけでなく、サンクトペテルブルク二〇〇四、キシニョフ二〇〇五、スーズダリ二〇〇六など）、各地で多くの研究者の知己をえたが、共同調査といえるものを実施したことはなかった。

本書の編者は、第三のグループに属する一人、ロシア社会政策研究所のセルゲイ・リヤザンツェフ教授との緊密な研究協力体制を樹立、モスクワ（だけでなく地方にも）や中央アジアでの現地調査を実施し、シンポジウムを企画、本書にまとめられた。ロシアやカザフスタンとのみごとな研究協力の成果といえよう。

III

本書の特色のひとつは、中央アジアでの移民問題が内包

する社会問題、人身売買を含む人権問題などに目を向けていることである。とくに第IV部「市民・移民・地域の安全保障」に含まれる諸章、第二章「中央アジア、ロシアにおける移民と『人間社会の安全保障』」、第三章「中央アジアのシティズンシップと安全保障」、第四章「シベリア・極東地域におけるステレオタイプと移民恐怖症」、第五章「ロシアにおける超エスノフォビア」、第六章「カザフスタンにおける人身売買のリスク」がそうであり、また第三章「中央アジアにおける人身売買との戦い」もそうである。もともと、Human Trafficking は国際移民問題ではどこでも一大研究テーマであったが、中央アジア研究では、少なくともこれまでわが国ではあまり紹介・注目されてこなかった問題でもある。

それとの関連で第三章と第一章の二つの章の筆者、カザフスタンのエカテリーナ・パディコヴァ女史のコントリビューションについてひとこと触れておこう。彼女は「中央アジア人身売買撲滅NGO協会」の代表で、被害者救済の運動を担う研究者である。中央アジア諸国が長く封建的な身分制や女性差別の慣行でならされてきたことが奴隷的な労働や搾取を温存させてきた背景にあり、社会主義から市場経済への転換とその混乱のなかで女性の売春や人身売買を横行させてきたこと、彼らを保護すべき法的システムや社会意識の遅れを強く指摘している。もっともこれは経

済の後進性のためばかりでなく、東南アジアやカリブ海周辺、ヨーロッパでのロシア女性の強制売春など、どこでも広く見られる問題だといえる。

また、バディコヴァ女史によると、今のところ救済のための活動資金は海外からの支援に頼っているのが現状であり、最近の国際金融危機で支援規模が縮小しつつあるようだ。とはいえ、カザフスタンが他の中央アジア諸国とは異なっており、第三部の諸章の分析に見られるように、経済成長を背景にして移民排出国から受入国に転換したという状況のなかで、今後は被害者救済や国民の意思改革面でのいっそうの努力が望まれる。

IV

ロシア・中央アジアの労働移民の特殊性を評価するために、他の地域のそれと対比してみること、とくに東アジア、東南アジアとの比較が重要ではないかと思われる。本書の対象からは若干外れるが、ベトナムとロシアとの関係も無視できない。ベトナムは、旧ソ連時代の「盟友」で、青年の教育・人材育成に協力してきただけでなく、ロシアで企業を立ち上げ、そこに大量のベトナム人を雇用してきたという経緯があり、その人流面でのパイプとネットワークは今日も強固だ。二〇〇七年には、ロシアとベトナムの

労働移民問題に限定した大きなシンポジウムがモスクワで開かれたほどだ。リヤザンツェフ教授のリーダーシップで可能となったこのシンポジウムに出席してその強さに驚いた。またごく最近では、ミャンマーの軍事政権との間に密かに進められてきた軍事・エネルギー関係の政府間協力をもとに軍人や技術者の人材育成にもロシアは熱心で、多くの関係者が「ベトナム・ロシア」的交流を行っている。

もっとも、ここまで来ると、単なる二国間・地域間関係の枠を超えて、もろに「国際政治の力学」が作用している領域となる。また、今後の政治状況とも関わるが、プーチン政権による旧ソ連復活、「ロシア帝国」再建の野望を見るうえで、こうした国際人流・労働力移動が果たす役割にも注目しておかねばならない。

最後に、本書の「ロシア語版・姉妹篇」が出版されたことにも触れておきたい。『中央アジア諸国からロシアへの労働移民——フローのモデル化』（モスクワ、二〇一一、文献④）がそれで、セルゲイ・リヤザンツェフ氏と堀江典生氏の共著で、構成は全一〇章、そのうち第七章と最終の第一〇章（分量にすると両者で七割弱）が本書と同一だ。他の章は、タイトルは似ていても内容は異なり、中央アジアからの移民問題への政策提言（第九章）などもあり、研究助成機関への配慮（？）もうかがわせる。というわけで、ロシアの読者向けに出された本書の姉妹篇といつてよ

からうが、これがロシアで出版されるということも、本書の重要性を示す今ひとつの証左であろう。

●参考文献

- ① 大津定美編著（二〇〇五）『北東アジアにおける国際労働移動と地域経済開発』ミネルヴァ書房。
- ② 平泉秀樹編著（二〇〇六）『東北アジア地域における経済の構造変化と人口変動』アジア経済研究所、明石書店。
- ③ 赤羽恒雄、アンナ・ワシリエヴァ共編著（二〇〇六）『北東アジアにおける人口移動』国連大学出版。
- ④ Моделирование потоков трудовой мигрантов из стран центральной Азии в Россию, СюРязанцев, Н. Хорие, Москва, 2011, с. 191.
- ⑤ Nancy Foner et al Eds, Immigration Research for a new Century, Multidisciplinary Perspectives, Russel Sage Foundation, NY, 2000.
- ⑥ Craig A. Parsons and Timothy M. Smeeding Eds.; Immigration and the Transformation of Europe, Cambridge U.P., 2006, pp.480.